

令和 2 年 2 月 25 日

教 育 長 様

代表者 校 園 名 :	大阪市立本田小学校	校印
校 園 長 名 :	錢本 三千宏	
電 話 :	06-6851-1531	F A X : 06-6851-3194
事務職員名 :	喜連 尋滋	
申請者 校 園 名 :	大阪市立成育小学校	
職名・名前 :	主務教諭 大林 正法	
電 話 :	06-6932-0061	F A X : 06-6932-6360

研究コース	
グループ研究Bコース	
選定番号	215
校 園 コード (代表者校 園 の市費コード)	
561155	

平成31年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇平成31年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	グループ研究Bコース	研究年数	新規研究 (1年目)
2	研究テーマ	算数科と社会科との融合授業 —データの活用を通じた深い学びの追求—			
3	研究目的	<p>・新学指導要領が出され、算数科においては新領域「データの活用」が新設された。設定理由として「身の回りの事象をデータから捉え、問題解決に生かす力、データを多面的に把握し、事象を批判的に考察する力の育成を目指す」ことが述べられている。これは社会科で、授業のはじめに資料を読み取り問題解決していく場面で必要とされ、算数科で身に着けた力がそのまま要求される。したがって、算数科と社会科をデータの活用という観点で融合させていくことは、今日的課題として研究目的にするべきことと捉える。膨大なデータから児童が主体的対話的にデータのもつ特徴や傾向を把握し、情報を整理し、選択する過程を通して、問題に対して自分なりの結論を出したり、その結論の妥当性について批判的に考察する深い学びを明らかにする。</p>			
4	取り組んだ研究内容	<ol style="list-style-type: none"> 1) 本研究の目的と内容を明確にし、研究員全員が共通理解する。 * 6月5日 第1回研究会開催 2) 公開授業の内容、授業者の決定等を話し合う * 6月12日 第2回研究会開催 3) 研究代表校長先生のご指導 * 7月1日 第3回研究会開催 4) 授業改善、課題解決のための先進校へ派遣 7月に3名 (第66回算数授業研究公開講座) 8月に3名 (第31回全国算数授業研究大会) 11月に1名 (第5回日本UD学会全国大会) 2月に2名 (学習公開・初等教育研修会) 5) 大学教員等の研究者から指導や助言を得るため学会での本研究発表及び研究会へ派遣 8月に1名 (第101回全国算数数学教育研究大会、日本科学教育学会第43回年会) 12月に2名 (第44回 新算研湯河原セミナー) 6) 全市公開授業に向けての指導案検討会の実施 9月24日、10月4日、10月24日、11月14日 7) 全市公開授業に向けたプレ授業の実施 5年3組 11月12日 5年4組 11月13日 5年1組 11月15日 8) 全市公開授業実施 11月21日 9) 全市公開授業事後反省会 12月10日 10) 最終まとめ 2月10日 			

大阪市教育振興基本計画に示されている、**子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上**および**教員の資質や指導力の向上**について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。

【校内児童アンケート調査結果からの検証】

- ・「勉強はわかりやすいですか」の問いに対する「はい」「どちらかといえばはい」と答えた肯定的な回答率・・・93%（昨年度90%）
- ・「学校の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えをしっかりとつことができ了吗か」の問いに対する「はい」「どちらかといえばはい」と答えた肯定的な回答率・・・92%（昨年度89%）

児童はアンケート調査結果から勉強がわかりやすと回答した回答率が昨年度よりも3ポイント上昇していること、学校の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えをしっかりとつことができたと回答した回答率が昨年度よりも3ポイント上昇していることから、授業改善によって授業がわかりやすくなっている効果が発現されていると考えられる。公開授業等で算数科で学んだグラフの見方や割合の考え方を意識的に用いて社会科でグラフを読み取り、友達との対話を通してより深い学びを主体的に取り組む姿が見られた。

【校内保護者アンケート調査結果から】

- ・「お子さんは楽しく学習できていますか」の問いに対する「はい」「どちらかといえばはい」と答えた肯定的な回答率・・・90%（昨年度91%）
- ・「お子さんは何事にも粘り強く取り組んでいますか」の問いに対する「はい」「どちらかといえばはい」と答えた肯定的な回答率・・・82%（昨年度81%）

保護者も学校の勉強が児童にとってわかりやすいと回答した方が90%おられることから、子どもが授業に楽しく取り組んでいることを保護者に伝えていると考えられ、一定の効果があつたと考える。

また、算数科・社会科と別々の教科として捉えていたものが、今回のような取り組みを通して、関連づけて考える力がついたという感想も聞かれた。

【平成31年度学力経年調査結果から検証】

学年	学校平均	大阪市平均
5年算数	59.1	58.2
5年社会	57.5	55.0
6年算数	75.2	73.2
6年社会	60.4	62.7

5年と6年の算数科については、授業改善によって授業のわかりやすさが感じ取られることから、今回の経年調査でも一定の効果があつたと考える。しかしデータの活用だけを通して効果を上げていくには限界があり、また、6年の社会科では本市の平均より下回っている結果やを踏まえて更にカリキュラムマネジメントを基に研究を進め、どのような手立てが有効であるか検証を重ねていく必要がある。

【研究発表会での教職員に対するアンケート結果からの検証】

- ・「本日の公開授業は、今後の授業づくりの参考になりましたか」の問いに対する肯定的な回答率・・・97%

感想・意見の自由記述においては、授業について、「4時間目の5年4組の学級がすばらしかったです。学級が活性化しているからこそ良い授業が成り立つのだと思います。」「5時間目の社会の授業で、5年生の社会であれだけ子どもたちが前で堂々と発表できるのは素晴らしいです。発表ノートも上手につくっていて、先生のこれまでの準備がきめ細やかで丁寧なんだと思いました。」「4時間目の算数のデータの活用と社会のグラフの見方のつながりがなるほどと思ったので、自校のカリキュラムマネジメントの作成に生かしていきたいです。」このアンケート結果から、5年の算数科の割合で学んだ帯グラフや円グラフのデータの活用を活かして、社会科で活用できたこと。本研究の目的と方法を、具体的な授業を公開して子どもの姿を通して明らかにでき、今回のデータの活用は新学習指導要領での算数科の新領域であり、また、総説に書かれているカリキュラムマネジメントについて本研究で算数科と社会科を取り上げ、実践して検証した結果を先生方今後の授業設計に寄与できたことは一定の成果であった。

《まとめ》

児童は、アンケート調査結果から「勉強がわかる」と回答した回答率が上昇していることから、授業がわかりやすくなっていることが表れていると考えられる。また、保護者も肯定的に捉えていることが多く、改善効果があったと言える。

また、研究発表会では、本市以外の先生方も多数見えられ、招聘講師による講演に講師先生の公開授業について「大小様々な技術が詰まったすばらしいものでした」「子どもたちを細かく見て褒める言葉をたくさん伝えられていました。自分に足りてないところだと思いました。とても勉強になりました。また、ぜひ呼びしてほしいです。」「子どもに対する声かけや褒め方、数値などとても学びになりました。」「子どもが発表した後に（講師の）細水先生が子どもの発表の仕方（言葉の使い方）を価値づけしている場面が素敵でした。子ども発のことを教師が有意味化していくと、どんどん学級に広がっていくと思いました。」というコメントが寄せられた。本校の教員たちからも「目から鱗」と大絶賛の声が寄せられ、明日からの授業改善に取り組んでいこうとする姿が見られらことは大きな成果であった。

また、授業を受けた子どもたちが講師先生の書いた書籍を求めて本屋へ向かい探して続きの授業を受けたいと言っている状況を生み出し、子どもたちへも多大な好影響を与えた。

筑波大学附属小学校での公開授業や研修会等に参加し、データの活用の授業はPPDACのサイクルでの授業を子ども自身が問いをもち、それが解決できたら、また次の問いが生まれどんどん学びが深く広がっていくことが大切であることを学び取り、子どもの素直な問いを大切にしながらそれを価値づけて発展統合させるような発問の仕方、授業づくりの方法を本校や本市の教員に発信できたことは大きな成果である。今後このような学習の進め方を具現化した授業を考え実践することで、より明らかにしていきたい。

《課題》

社会科の授業では帯グラフや円グラフを読んで、その結果を分析しながら思考を進めていく内容であったが、算数科の授業では今回は給食の好きな物メニューを生データとして取り扱ったので、工業生産額や米の収穫高と農業就業人数の変化など社会的な内容にすれば、内容としてもさらに社会科との融合性が図られた。また、公開授業日が講師の先生の都合で11月実施になったが、算数科で扱った百分率などの割合の内容は3学期教材であり、年間計画に沿って公開授業の内容を吟味していく必要がある。また、社会科では全部の班に発表をさせる発表会になり、深い学びへと思考を発展させるために、重複したところは発表させない工夫や、二つの意見の対立軸を設けてディベート形式での討論をさせるなどの改善を図っていく。

6	研究発表等の日程・場所・参加者数	研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。			
		日程	元 年 11 月 21 日		参加者数 約 40 名
		場所	大阪市立成育小学校		
		備考			